

誰かを笑顔にする税金

福岡教育大学附属福岡中学校 2年 横山 祐希

私は読書が大好きだ。中学生になってからも隙をみて様々な本を楽しんでいる。本のない生活なんて、とても考えられない。そしてもう一人、私と同じように読書が大好きな人が身近にいる。それは私の祖父だ。

私の祖父は他県に住んでいて、月に一回程家族でテレビ電話をする。その度に祖父は、最近読んだ本の話やそれは楽しそうに聞かせてくれる。祖父に本から仕入れた雑学ともいえる知識を聞かされる度に、私はへえー、知らなかったなあ、と言う。祖父の読書量に私はいつも驚いてばかりだった。

ところが最近聞いたところでは、祖父は目の病気を持っていて、細かい字を読むのがあまり得意ではないという。一体どうやってあれだけの読書をしているのだろうか。私は疑問に思っ母に尋ねてみた。明らかになったことは、祖父は読書をしていただけではなく、「聴書」をしていたということだった。祖父は「オーディオブック」を利用していたのだ。

オーディオブックとは、本を読み上げて音声化したものである。このおかげで目の不自由な祖父も、情報を耳から取り込むことができていたのだ。

「それ、どこで売ってるの？」と、私は母に聞いた。

「自治体から支給されるんだよ。」

「ふーん。いくらするの？」

「お金は払っていないの。」

私は驚いた。

「誰が払ってるの？」

「その分のお金は、税金で賄われるの。」

私は学校で、国民から集めた税金は、道路を直したり、新しい橋を架けたりするのに使われるということを学んでいた。しかし道路や橋は自分だけではなく皆で使うものなので、これらに税金が使われることに特に驚きは感じていなかった。しかし税金は、祖父のオーディオブックのような、一人一人の幸せのためにも使われていたのだ。税金が使われる対象である「国民」の中に私も含まれているのだということが、その時はっきりと感じられた。私と「税」という言葉との距離が、ぐんと近くなったように思った。

最近、消費税をはじめ、「増税」に対する否定的な意見をよく耳にする。私自身は納税者ではないが、それでも「増税って必要なのかな。国民にとっては負担になるんじゃないかな」とは思っていた。けれど税の使われ方を新たに知った今、私の中での「増税」に対するイメージはプラスの方向に向かっている。

『聴いた』本について語る祖父の笑顔が思い出される。将来私の払う税金が、こんなふうに誰かを、そしてその周りの人を笑顔にするのかもしれない。この気づきを胸に、前向きな気持ちで税金を納めることができるような大人に、私はなりたい。